『ウルスリのすず』　あらすじ

山奥の小さな貧しい村に、ウルスリという男の子がお父さんとお母さんと暮らしていました。その子の家は、壁に絵が描いてあるこの地方の伝統家屋です。ウルスリは、水くみや山羊の乳搾りなど、家の仕事をよく手伝います。

明日は、子ども達が鈴を下げて練り歩く春迎えのお祭りです。子ども達は村の広場に集まって、鈴を借ります。
でもウルスリのもらった鈴は、一番小さな鈴。がっかりしたウルスリは、夏の山小屋にあった大きな鈴のことを思い出しました。矢も楯もたまらずに、雪をかきわけ山小屋へ向かったのです。扉は閉まっているので、窓からもぐりこみました。

ありました！その大きな鈴は壁にかかっています。なんと立派な鈴なのでしょう。山小屋にあったパンをかじると、
ウルスリは急に眠たくなりました。村では皆がウルスリをさがしています。お父さんとお母さんは、心配で眠れません。

朝日が昇ると、ウルスリは目をさまし、一目散に山をかけおりました。勿論、大事な鈴をしっかり肩にかけています。
お母さんの、喜んだこと。その日は鈴行列のお祭り、一番大きな鈴をつけたウルスリは、なんと行列の先頭にいます。
ビム、バム、ブム、大きな音を響かせながら歩いています。見ている人も嬉しそう。